

2026年(令和8年)3月23日

病院長からの 退任のご挨拶



弘前大学医学部
附属病院長 袴田 健一



2023年4月、大山力先生の後任として病院長に就任して以来、教職員の皆様、そして地域社会の多くの皆様のご理解とご協力のもと病院運営に携わってまいりましたが、このたび無事に退任の日を迎えることとなりました。この間に賜りました温かいご支援とご厚意に、心より御礼申し上げます。

振り返りますと、就任前後は新型コロナウイルス感染症の影響が色濃く残る時期でした。人と会うことや移動、会食すら制限され、とりわけ医療従事者とそのご家族には大きな負担がかかりました。2023年5月、感染症法上の位置づけ変更を受けて開催した「感謝の夕べ」コンサートでは、「ライスボール」の明るい歌声に励まされ、涙する職員の姿が強く印象に残っています。あれから3年、社会はウィズコロナの段階に入り、院内にも徐々に活気と笑顔が戻ってきたことを大変嬉しく感じています。

一方で、コロナ禍を契機に医療環境は大きく変化しました。受診控えや入院制限の影響、外来診療へのシフト、少子化の進行などにより病床稼働率は低下し、多くの医療機関が厳しい経営状況に直面しました。さらに、エネルギー・物価高騰や人件費上昇も重なり、国立大学病院においても例外なく経営基盤の強化が求められました。本院も同様の課題に直面しましたが、診療科横断的な病床管理の見直しを進め、病床管理室によるベッドコントロールを導入することで稼働率の改善を図ることができました。2025年度の経営危機を乗り越えられたのは、教職員の皆様が職種や部門の垣根を越えて力を合わせてくださった結果であり、改めて深く感謝申し上げます。

この3年間は変革の連続でもありました。入院棟東の竣工、医師の働き方改革への対応、看護師の増員とタスクシフト推進、病院改革プランの策定、小児医療セン

ターおよび遠隔医療センターの設置、災害医療連携協定の締結、「さくら基金」の創設など、多くの新たな取り組みが実現しました。また、国際交流や教育体制の整備も進み、診療・教育・研究・地域貢献の基盤強化につながったものと考えております。現在も手術体制の拡充、次期病院情報システムの検討、病院再開発計画など将来に向けた準備が進んでいます。

これからも時代の変化に対応した改革が続きますが、次期病院長である横山良仁教授のリーダーシップのもと、本院は地域社会に信頼される基幹病院として、さらに発展していくものと確信しております。

最後になりますが、この3年間で、多大なるご支援をいただいたすべての皆様に心より感謝申し上げます。本院のさらなる発展と、皆様のご健勝を祈念し、退任のご挨拶といたします。

各診療科等の紹介 【血液浄化療法部】

血液浄化療法部は、2023年4月1日に従来の血液浄化療法室から改組され、本院における腎代替療法の中核を担っています。腎臓内科と泌尿器科が役割分担しながら診療を担当し、安定した診療体制の維持に貢献しています。

2025年の1年間で、当部では129名の維持透析を施行しました。新規透析導入は15名で、内訳は血液透析7名、腹膜透析8名でした。また、血液浄化療法部への改組に必須であった外来血液透析患者も現在2名となり、安定して維持透析を行っています。

近年は透析療法に加え、選択的血球除去療法(LCAP, GCAP)や吸着型血液浄化器(レオカーナ)といった治療件数が増加傾向にあります。前年度はLCAP・GCAP12名、腹水濾過濃縮再静注療法2名、吸着型血液浄化器4名、LDL吸着2名を施行しました。さらに、腎移植や各疾患治療目的での血漿交換依頼も昨年は12件と増加しており、当部の診療領域は着実に広がっています。

診療体制は、月・水・金の2部制および火・木の1部制で運用しており、火・木は主にアフター

シス治療を中心に行っています。症例増加に伴い、近年は月1回以上、土曜日にも透析室を稼働せざるを得ない状況となっています。透析室の専任医師・専任スタッフは1名ですが、兼任として医師10名、看護スタッフ10名(ICU兼任)、臨床工学技士5名が連携し、チーム医療で診療を支えています。

また、月1回、外来透析患者を対象としたカンファレンスを開催し、情報共有にも力を入れています。体外循環は医療安全上、大きなリスクを伴う治療であることから、職種を超えて活発に意見を交わし、安全で確実な透析医療の実践を目指しています。その一環として、医療情報部の協力のもと、急変リスク管理に活用可能なプログラムを開発し、その成果を英文誌に発表しました(Kato N et al. *Artificial Organs*, 2025)。本年2月からは、シャント管理の質向上を目的に外部技士を招聘し、シャントエコーの指導を受ける予定であり、さらなる診療レベルの向上を図ってまいります。

(血液浄化療法部長
嶋山真吾)



【令和7年青森県東方沖地震】弘前大学医学部附属病院DMAT隊出動

2025年12月8日深夜、青森県東方沖を震源とする地震が発生し、県内各地で揺れが観測されました。本院DMAT(災害派遣医療チーム)は、発災直後から情報収集と出動準備を開始し、青森県庁内に設置された青森県DMAT

調整本部へ先行隊2名を派遣いたしました。

県内各地での被害状況の確認が進む中、むつ総合病院においてスプリンクラー設備の故障が発生し、複数階にわたり病棟機能の維持が困難となっていることが明らか

になりました。患者の安全確保と転院搬送が急務であると判断され、本院はDMAT隊員4名と弘前消防事務組合職員1名の計5名を追加し、DMAT隊員5名と弘前消防事務組合職員1名をむつ総合病院へ派遣、DMAT隊員1名を青森県

DMAT調整本部に残す配分を行い、総勢7名が活動にあたりました。

むつ総合病院では、被害状況の詳細な把握に加え、域外医療機関への患者転院搬送の調整を担当いたしました。現地医療スタッフや青森県DMAT調整本部と密に連携しながら、県内の各医療機関から派遣された7チームのDMAT隊が円滑に搬送を実施できるよう支援を行いました。限られた時間と資源の中で、各機関が役割を分担しながら迅速に対応できたことは、平時からの訓練や研修を通じて築いてきた「顔の見える関係性」の成果であるといえます。

本院は、地域の災害医療を担う拠点病院としての責務を改めて認識するとともに、今後も継続的な訓練や体制整備を進め、災害時に確実に地域を支えられる医療機関であり続けることを目指してまいります。

(高度救命救急センター長 花田裕之)



先憂後楽

働き方改革時代における 臨床研究基盤の整備



病院長補佐 新岡 典典

2024年4月より医師の働き方改革が本格的に施行され、医療現場は大きな転換期を迎えています。本改革は持続可能な医療提供体制の構築に不可欠である一方で、大学病院が担う診療・教育・研究のうち、特に研究活動は時間的制約の影響を受けやすく、その推進の在り方にも変化が求められています。これまで臨床研究の多くは日常診療の合間に進められてきましたが、今後は限られた時間の中でも継続できるよう、計画段階から実施に至るまでを適切に支

える体制を整備していくことが重要となります。また、こうした取り組みを支える基盤として、日常診療の中で得られる情報を、将来の検証や分析に活用可能な形で整理し、蓄積していくことの重要性も高まっています。

そのためには、治験、特定臨床研究、および倫理指針に基づく臨床研究など、人を対象とする研究の特性に応じて、研究計画の立案段階から科学的妥当性と倫理的適正を十分に整理し、適切な審査と実施につなげていくことが不可欠

です。また、研究実施に必要な手続きの調整や、診療の中で得られる情報を研究に活用可能な構造として整理・管理する体制を整備することも重要です。このように、計画立案から審査、実施、情報管理に至るまでの一連の過程を組織として支える仕組みを充実させることは、関係者の負担軽減につながることも、働き方改革の下においても研究活動を持続的に推進するための重要な条件となります。

医療を取り巻く環境が変化の中で、臨床研究は日常診療と連続

した活動として位置づけられ、それを組織として支える体制の整備が求められています。将来の医療の発展を見据え、今、研究支援体制や診療情報の活用基盤を整えていくことは、「先憂後楽」の精神に通じる取り組みといえるでしょう。今後は、本院における臨床研究を支える環境の整備を着実に進めていくことが重要であると考えています。本院の臨床研究の推進と発展に向け、引き続きご理解を賜りますようお願い申し上げます。

第5回日本不整脈心電学会東北支部地方会
最優秀演題賞を受賞して

2025年10月18日に開催された第5回日本不整脈心電学会東北支部地方会において、「Pulsed Field Ablation記録用紙を基にした肺静脈隔離術後残存電位と通電回数に関する検討」を発表し、メディカルプロフェッショナル最優秀演題賞を受賞いたしましたのでご報告申し上げます。

本受賞の背景として、従来の心房細動治療では高周波電流や冷凍凝固を用いたアブレーションが広く実施されてきました。これらは高温または低温による熱的作用で心筋を焼灼するのに対し、近年新たに発売されたパルスフィールドアブレーション(PFA)は不可逆的電気穿孔法を応用した非熱的アブレーション法であり、標的的心筋細胞に対する組織選択性を有する

点が特徴です。本院は国内の先行導入施設として、合併症リスクの低減が期待されるPFAを他施設に先駆けて導入し、約400例という数多くの症例を経験する機会に恵まれました。

導入初期の本邦では詳細なデータがなく、透視ガイド下肺静脈隔離術における通電状況の可視化や通電回数の標準化が確立されていなかったため、我々は独自に通電方向および回数を記録するPFA記録用紙を作成し、残存電位との関連を検討しました。引き続き本記録用紙を活用し、通電状況の可視化ならびに通電回数が治療効果へ与える影響について検証していきます。

本研究が、東北のカテーテルアブレーション業務に携わる臨床工学技士が集う学術の場において評価されたことを大変光栄に思います。今後も不整脈治療チームの一員として、より一層研鑽を積んでまいります。

最後に、日頃の臨床業務および本発表に際しご指導を賜りました木村正臣准教授をはじめ、循環器内科の先生方ならびに日々共に業務に携わる臨床工学部の皆様に深く感謝申し上げます。

(臨床工学部 主任臨床工学技士 山本圭吾)



診療奨励賞・診療技術賞の受賞
「本院独自システム開発と導入によるオンライン診療の進展」

この度は「本院独自のシステム開発と導入によるオンライン診療の進展」に関する取り組みに対し、診療奨励賞(診療技術賞)という名誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。ご指導・ご支援を賜りました多くの皆様に、心より感謝申し上げます。

医学部ウォーカーにも寄稿予定ですので、ここでは視点を変え、本取り組みに至る経緯について述べさせていただきます。

私はもともと事務職として病院に勤務しておりました。経理調達課で医療材料の契約業務を担当し、その後は総務課において、医

診療奨励賞・診療技術賞の受賞
「外来パーキンソン病患者の自宅リハビリテーション支援の工夫」

この度、「外来パーキンソン病患者の自宅リハビリテーション支援の工夫」に対し診療奨励賞(診療技術賞)を賜り、誠にありがとうございます。ご選考くださった諸先生方、またご推薦くださった脳神経内科の富山教授、西島先生に心より感謝申し上げます。パーキンソン病治療において、運動療法は薬物療法と並ぶ重要な柱です。しかし、外来で医師が必要性を説明するだけでは、自宅での継続にはつながらないという課題がありました。そこで、看護師が主体となって支援に関わる体制へと見直し、患者様の生活状況や身体機能に合わせて運動を選択し、日々の実施状況を「可視化」できるよう記録用カレンダーをお渡しする取り組みを始めました。次回受診時にはカレンダーと一緒に確認し、できた日は共に喜び、難しかった点を振り返りながら対話を重ねることで、運動の継続率は大きく向上しました。特別な機器や大きな費用をかけなくても、小さな工夫が患者様の行動変容につながったことは、私たちにとっても大きな喜びです。外来は常に時間との戦いですが、スタッフ同士で

知恵を出し合い、看護師が十分に関われない場面では、事務補佐員が診察室での情報共有に協力してくれるなど、外来全体で支援の質を保てるよう連携してきました。担当者が変わっても取り組みが継続できたのは、スタッフ全員が同じ目的を共有し、協力して取り組んできたからだと感じています。この取り組みは学術集会でも発表し、優秀演題として評価をいただき、スタッフにとって大きな励みとなりました。そして何より、脳

神経内科の先生方が私たちの活動を認め、チームの一員として信頼し支えてくださったことが原動力となりました。今回の受賞は、外来チーム全員で積み重ねてきた成果です。今後も患者様が安心して運動に取り組めるよう、支援の質をさらに高め、より良い外来づくりに努めてまいります。引き続きご指導ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

(入院棟東7階 看護師長 小山内愁子)



診療奨励賞・心のふれあい受賞
「産後ケア事業への取り組み」

この度は「第26回医学部附属病院診療奨励賞(心のふれあい賞)」という名誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。私たちの病棟が行っている「産後ケア」

の取り組みを評価していただき、大変光栄に感じております。

近年、核家族や地域のつながりの希薄化により、産後の母親が孤立しやすく、サポートが得られにくい状況だといわれています。育児不安の軽減と母児の健康維持を図ることを目的に、2024年から弘前市でも産後ケア事業の提供を開始することになりました。本院でも産後ケア事業を提供する施設として急ピッチで準備を進め、同年7月から宿泊型の産後ケアの提供を始めています。

これまで7名が産後ケアを利用し、利用した方からは「自宅に帰ってからの育児不安を専門家に聞いてよかった」「赤ちゃんを預かってもらい、睡眠がとれてリフレッシュできた」との声がかけられました。また、一度も母児同室の経験がなく退院した母児に対して、産後ケアを利用し24時間経過してもらおうことで「退院後の赤

ちゃんとの生活をイメージできた」など、母児の心身の回復や育児不安解消につなげることができていると実感しています。

今後は、より休息がとれるようアロマの活用やハンドマッサージ、児の安全管理目的でベビーモニターの導入を検討し、今まで以上に少しでも安全に過ごせる環境を工夫し、提供したいと考えています。また、産後ケアは分娩件数の減少による空床の有効活用や、助産師の専門性を生かす場を拡大する効果もあると思っています。

多職種と連携しながら開始し、助産師が一丸となって始めた産後ケアは、現場で関わってきたスタッフの協働による成果であり、この受賞は大きな励みになります。今後も地域における大学病院の役割を意識し、温かな産後ケアを行っていききたいと思います。

(第2病棟3階 助産師 古山恵子)



弘前大学医学部附属病院へのご寄附、
心より御礼申し上げます

お名前のご掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、2025年8月から2026年1月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

【診療科等 寄附者ご芳名】

- 山田 良一 様 ○今 武親 様 ○石澤 知子 様
- 鈴木 秀和 様
- 八戸工業大学第二高等学校 医療コース 代表 梅田 周 様
- 森山 裕三 様 ○對馬 壽夫 様
- 對馬 知穂 様 ○木村あさの 様 ○渡邊 広二 様
- 株式会社ナラトモ 代表取締役 奈良 清貴 様
- 匿名希望 11名

【さくら基金 寄附者ご芳名】

- 對馬 昭義 様 ○伊藤真規子 様 ○藤田 一雄 様
- 鳴海美津子 様 ○渡辺 敏雄 様
- 匿名希望 5名

*掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

師・看護師の勤怠管理や各種手続き業務に従事してまいりました。裏方の業務ではありましたが、その経験を通して医療現場の仕組みや課題を肌で学ぶことができました。

一方で、私は弘前大学理工学部出身で、プログラミングを得意としております。院内でのコロナワクチン接種業務においては、受付確認システムを作成するなど、業務改善に技術を活かす取り組みも行っていました。

3年前、遠隔医療や院内DXを推進するため、医療情報部に技術職員の枠が新設されました。自分の経験と技術を活かせると考え、事務職から技術職へ転職いたしました。

当時の医療情報部長の佐々木先生と構想を重ねながら形にしていたものが、現在オンライン診療で使用している独自システムです。

明確な先行事例がない中での挑戦でしたが、まず院内での運用体制を整える必要がありました。現医療情報部長の松坂先生のご尽力のもと、病院長への説明等を行い、本院としての正式な運用枠組みを整備いたしました。

その基盤をもとに、むつ総合病院の皆様と何度も議論を重ね、試行錯誤を繰り返しながら、病院間オンライン診療の導入を進めてまいりました。

振り返りますと、本取り組みがここまで形になったのは、多くの皆様のご理解とご支援があったからこそであると感じております。

本受賞を励みに、今後も現場に根ざした技術を着実に積み重ね、医療の質の向上に貢献してまいりたいと思います。

(医療情報部 技術職員 成田皓平)



【編集後記】

第120号の南塘だよりをお届けします。本号では、病院長退任のご挨拶をはじめ、各部門の取り組みや表彰、災害派遣DMATの活動など、本院の努力と成果を多面的にご紹介しています。日々の診療や業務の中で、職員が専門性を発揮し、連携しながら地域医療を支える姿に、あらためて心強さを感じます。また、寄附を通じて本院を応援して下さる皆さまの温かいご支援にも深く感謝申し上げます。市内では降雪が続く、足元の悪い日が続いております。落雪や路面凍結による事故には十分ご注意ください。寒さも厳しい時期ですので、どうぞ体調に気をつけて温かくお過ごしください。本号が、皆さまに本院の現在の歩みをより身近に感じていただく一助となれば幸いです。

(病院広報委員会 委員 米田博輝)